FDセミナーを実施して

――セミナー報告・雑感――

都市環境学部　准教授
竹宮　健司

□FDセミナーの概要

本セミナーは，首都大学東京のFD委員会が組織されて初めて主催するセミナーである．新大学の教育環境を組織的に改善・充実させていくため，本学の現状を認識するとともに今後の方向性を探ることが目的である．セミナーの内容は，１）先進事例の把握，２）現状認識（授業評価結果報告），３）実践事例報告の３部構成で企画された．当日は，司会の西郡委員の進行で進められ，高橋理事長を含め教職員・学生６４名の参加者を得た．

□各セッション報告

（１）FD委員長挨拶　まず主催者を代表して，上野淳基礎研究センター長（FD委員会委員長）が挨拶を行った．上野委員長は，FD委員会は授業改善を目的とすることを明言し，１．SEの概要，２．自己点検委員会とFD委員会との役割分担，３．全学組織と部局との関係（部局毎にFD部会を組織し専門教育を評価していく），４．教員業績評価との関係（SEは授業改善の仕組みであって，教員の業績評価に反映させるものではない）５．評価から授業改善へのサイクル(学生の参加等を含む)，などを述べた．さらに，現時点では，こうしたFDの体制作りが課題であるとの認識を示した．

（２）講演「FDの目指すもの- Developする課題はなにか- 」(松岡信之教授：国際基督教大学)　FDに長く取り組まれてきた国際基督教大学（ICU）の松岡信之教授による基調講演が行われた．同大学におけるこれまでのFDの実践経緯とその中で得られた知見が紹介された．ICUにおけるFDの取り組みは，大学改革と関連させながら1981年頃から個人ベースで検討が始まり，1986年には「FD研究会（自主活動)」，1988年には「FD研究プロジェクト」が開始され，1991年には「一般教育に関する学生意見調査」の実施，1995年には全学的の組織的な取り組みが行われるようになった．2001年にはFD委員会が設置され，Faculty Seminarが開催されるようになった．2000年には大学基準協会相互評価，2005年にはAAELのAccreditationを申請している．こうした取り組みを通して，「Developする課題は，理念を共有する（Consensus形成の）方法，教育システムの点検方法，学生と教員の間の調整方法である」との結論が示された．

（３）「都立大学過去４年間のSEに関する継続分析報告」（星旦二教授：都市環境学部）都立大学の自己点検評価委員会から学生による授業評価について継続的に分析を行ってこられた星教授から４年間の継続分析の報告がなされた．「学生から見た教員への評価結果の相対位置を教員自身が知ることにより，改善すべき自分の課題を明確にし，その後の授業改善に役立てる」ことの重要性を強調した．また，都立大でのSEの分析からは「学生の評価が教員の評価より高く，過去2回の評価では著しい改善が見られた」ことを報告した．

（４）「2005年度前期「都市教養プログラム」授業評価(SE)の概要報告」(舛本直文FD委員会委員長代理)舛本委員から本年度前期「都市教養プログラム」の授業評価アンケート調査の結果が報告された．全体的にみるとおおむね高い評価を得ているが，「学生参加」や「シラバス」等，評価ポイントが3.0を下まわる項目については授業改善の必要性があることを示した．また，学生と教員の評価の差(星教授の報告とは逆の傾向が見られる)があることを報告した．

（５）授業実践事例報告　本年度前期「都市教養プログラム」の中から７件の報告があった．

１）「文化分析批評入門」(亀沢美由紀助教授：基礎研究センター）報告者が当日出席できないため，事前に収録されたVTRによる発表であった．本講義は，具体例，理論，実践のサンドイッチ型の構成をとっている．この構成は，学生の理解を促す上で有効であると述べた．また，講義内容を深めるためには，ベースとなる研究が重要であることを強調した．

２）「教育問題を読み直す」（小国喜弘助教授：都市教養学部人文・社会系）本講義の教育方法上の工夫は，「ビデオ映像を用いて現実の問題をリアルに体感できるようにする」「対立する見解を紹介する」「講義中に３ー４人組の討論を組織する」「ブログを用いて講義後に感想を交換し得るようにした」ことである．特に，グループ討論やブログによる意見交換は，学生間の交流や他の学生の意見を踏まえた体験の重層化が可能になるとの報告がなされた．

３）「安全の科学」（長塚豪己研究員：システムデザイン学部）スライドやプロジェクターを用いたビジュアルな講義を行い，身近で具体的な事例もとに講義を構成しているとの報告があった．

４）「先端材料化学入門」（山口素夫准教授：都市環境学部）「環境と調和する新しい社会の創製を担う新材料」として，5 人の専門家が分担して，身近な材料を分かりやすく，五感を働かせて理解を促すような工夫しているとの報告があった．

５）「リハビリテーション概論」（渡邉修教授：健康福祉学部）一般論からではなく具体例からいろいろの症状を上げ，なぜ障害が起こったか，どこに障害があるのか，患者や家族の心理，どのようにリハビリテーションを行うか，など学生に考えさせる講義をしている．また，VTR や脳の立体模型，グループディスカッションなどを取り入れ，学生の理解を深める工夫をしているとの報告があった．

６）「現代社会と契約」（桶舎典哲准教授：都市教養学部法学系）如何に学生の雰囲気をつかんで教育効果を上げるかについての具体的な方法の紹介があった．途中に 20 分の休みを入れ，学生とコミュニケーションを図ることが有効であるとの指摘もあった．さらに，「学生自身によい授業を考えさせる」「メールマガジンを発行する」等の工夫を紹介した．

７）「生活の心理学」（加藤美智子助教授：学生サポートセンター）本講義は「導入５，講義 30，体験学習 40，まとめ 5，フィードバック 10＝合計 90 分」という時間配分で構成されている．また，クレヨンを用いたノンバーバル表現によって自分自身の感受性に気づく作業を取り入れたり，授業後の感想を教員が文字化し，次回の授業で配布するフィードバック方式の導入，など様々な講義の工夫を紹介した．

□雑感

本セミナーを通して，当初の目標である「本学の位置＝FD のスタートライン」を確認することはできたように思う．しかし，あまりに盛りだくさんの内容のため，それぞれのセッションで質疑応答の時間がほとんど取れなかったことは反省すべき点であろう．参加者のアンケート結果にもあるように，それぞれの発表者と議論する時間がもてるとより良かったように思う．

個人的には，授業実践事例報告で示された IT 技術（ブログやメルマガ）を授業に導入しているという報告には驚かされた．他にも自らの授業改善のヒントになる事柄や授業に取り入れてみたいと思う手法が数多く示されたことは有益であった．改めて考えてみると，我々研究者は，各自の研究分野で研究者としての交流や情報交換の場を築いてきているが，教育者の立場からすると，こうした交流・情報交換の場は極めて乏しいというのが現実ではないだろうか．中学や高校のように職員室で机を並べているわけでもないし，ましてや異分野の授業（教育方法）に触れる機会など日常的にはあり得ないのだから．

教育者としての交流・情報交換の機会を増やしていくこと，とりわけ，授業実践事例などの情報が容易に得られる仕組みづくりが必要であると実感した．まとまった研修やセミナーに参加することが難しい現状においては，優れた実践事例が，例えば Web 上で必要な時に参照できるようになっていれば，教員の個別の教育技術向上に役立つのではないかと思った．

□おわりに

本稿の「報告」は，本セミナーに記録係として同席した FD 委員の守屋先生のメモを参考に執筆しました．記して謝意を表します．ただし，「雑感」は著者の個人的な見解です．